

「梅雨の季節のカタツムリから学べること」



早くも6月を迎えました。6月は梅雨の月であり、アジサイやカタツムリがすぐに思い浮かび、そのようなイラストやカット、写真などをよく見かけます。雨がずっと何となく「うっとうしい」と感じることもありますが、動植物や作物にとっても必要不可欠な雨です。

アジサイは梅雨の時期に代表される花です。調べてみるとアジサイは「紫陽花」と書くようで、紫色の太陽のような花ということでしょうか。意味が伝わる表現だと思います。もっとも紫色だけでなく、青色系、白色系などいろいろあります。新改訳聖書第3版の詩篇58篇8節には「**彼らを、溶けて、消えていくかたつむりのように……**。」とあります。最新の新改訳聖書2017では「かたつむり」が「なめくじ」と翻訳されています。「彼ら」とはここでは神様を信じない悪しき者たちを指しています。梅雨の時期になると、アジサイの葉や茎、また壁などにカタツムリがしっかりとくっついているの見るがあります。子どもたちの多くはカタツムリや昆虫が好きですし、唱歌もあります。カタツムリの殻はいつもつやつやしています。私たちは日常生活の中で、たとえば衣類や食器に着いた汚れを落とすには洗剤などを使ってきれいにします。ところがカタツムリの殻はつやつやしているだけでなく、雨の水だけで殻についた汚れを簡単に洗い流すことができるそうです。また傷がついても2～3日で治るそうです。

さらに詳しい情報では、電子顕微鏡などで殻の表面を高倍率で観察してみると、細かい溝が殻の表面に縦横無尽に走っており、この溝には空気中から集められた水分が常に保たれていて、殻の表面は非常に薄い水の膜で覆われた状態にあるそうです。そのような状態の殻に汚れの元になる物質が触れた時、汚れは殻に直接「くっつく」のではなく、水膜の上に「乗る」ことになります。ここでさらに水を加えると、汚れの下に水が入り込み、殻から汚れが完全に浮き上がり、そして、水の流れによって簡単に流れ落ちてしまうとのこと。こうした殻の構造と汚れを落とす仕組みに着目した建材メーカー（リクシル）は雨が降れば汚れがきれいに落ちる外壁材を開発して、すでに実用化されているとのこと。カタツムリの殻の表面構造を模倣することにより、さまざまな汚れを水だけできれいに落とすことができるようになりました。国分寺キリスト教会の新会堂も完成からすでに5年以上が経過していますが、外壁掃除のために洗剤などを使ったことはなく、近くには畑や田んぼがあるため、季節によって埃っぽくなっていることはあるものの、雨や水道水のシャワーで簡単に汚れを落とすことができます。このように建材メーカーが研究し、開発した素材のもととなったカタツムリの殻をカタツムリはなぜ持っているのでしょうか。どうしてこんなに見事なデザイン設計の殻を、カタツムリが持っているのでしょうか。目に見えるものには必ずデザインの設計者（デザイナー）がいます。私の手元にある小学生向けの「ふしぎと発見がいっぱい！ 理科のお話し366」（PHP出版、2017年発行）という図鑑があり、別の視点から殻について書かれています。不思議とも言えるカタツムリの殻はやはり偶然に出来上がったものではなく、知的な設計者である神様が設計してくださったものとするのが、最も合理的です。何か漠然とした設計者ではなく、すべてのものの造り主なる、唯一の生ける神様が聖書に記されています。



現在、新屋島水族館はリニューアル工事のため、高松市中央卸売市場において臨時「市場水族館」としてオープンしています。先日、教会に来ている子どもたちと一緒にきましたが、いろいろな生き物（ペンギン、カワウソ、魚、エイ、クラゲなど）がいた中で、大きなカメもいました。いったいカメの甲羅（こうら）は何なのか、なぜ甲羅があるのかを調べてみるだけでも楽しいものです。聖書の詩篇146篇6節には「**主は 天と地と海 またそれらの中のすべてのものを造られた方。とこしえまでも真実を守り……**」と書かれています。

私たちが身近に見ることのできる生き物たちだけでなく、それらをデザインし、造ってくださった神様の偉大さと素晴らしさを、聖書を通して知ることができます。また「あなたという存在」が神様によって造られ、愛され、生かされているということを聖書から知らされて、心からの喜びと感謝に満ちた生活を送ることができますように、そして神の御子イエス・キリストをお送りくださり、十字架で私たちのために身代わりの死をとげることによって救いの道を備えてくださった神様を礼拝することの素晴らしさを知ることができますようにお祈りいたします。